

中国語の中の日本語

著者	陳 生保
会議概要（会議名，開催地，会期，主催者等）	会議名：日文研フォーラム，開催地：国際文化研究センター セミナー室，会期：1996年12月17日，主催者：国際日本文化研究センター
ページ	1-33
発行年	1997-05-30
その他の言語のタイトル	Chinese borrowing from the Japanese language
シリーズ	日文研フォーラム ； 91
URL	http://doi.org/10.15055/00005709

第91回 日文研フォーラム



中国語の中の日本語

Chinese Borrowings from the Japanese Language



陳 生 保
Chen Sheng Bao

国際日本文化研究センター

日文研フォーラムは、国際日本文化研究センターの創設にあたり、一九八七年に開設された事業の一つであります。その主な目的は海外の日本研究者と日本の研究者との交流を促進することにあります。

研究という人間の営みは、フォーマルな活動のみで成り立っているわけではなく、たまたま顔を出した会や、お茶を飲みながらの議論や情報交換などが貴重な契機になることがしばしばあります。このフォーラムはそのような契機を生み出すことを願い、様々な研究者が自由なテーマで話が出来るように、文字どおりインフォーマルな「広場」を提供しようとするものです。

このフォーラムの報告書の公刊を機として、皆様の日文研フォーラムへのご理解が深まりますことを祈念いたしております。

国際日本文化研究センター

所長 河合 隼雄

● テーマ ●

中国語の中の日本語

Chinese Borrowings from the Japanese Language

● 発表者 ●

陳 生保

Chen Sheng Bao

上海外国語大学教授

Prof., Shanghai Int'l Studies University, China

国際日本文化研究センター客員教授

Visiting Prof., Int'l Research Center for Japanese Studies



1996年12月17日（火）

発表者紹介

陳 生保

Chen Sheng Bao

上海外国語大学教授

Prof., Shanghai Int'l Studies University, China

国際日本文化研究センター客員教授

Visiting Prof., Int'l Research Center for Japanese Studies

- 1936.7 上海に生まれる
- 1955.9～64.8 北京大学東方言語文学系日本語科 大学・大学院卒業
- 1964.8～現在 上海外国語大学日本語系講師、助教授、学部長を経て現在は教授・同大学日本研究センター主任
- 1980.5～82.3 名古屋中京大学中国語科客員教授
- 1982.4～82.8 京都大学文学部研修員
- 1987.3～91.6 東京大学大学院比較文学比較文化研究室客員研究員
- 1991.3 『森鷗外の漢詩』により東京大学の学術博士取得
- 1996.7～97.6 国際日本文化研究センター客員教授

著 書：

『森鷗外の漢詩』上、下（1993年6月 明治書院）

編 集：

『日語』（第5・6・7・8冊）1986～88年 上海外語教育出版社

論 文：

「中日文化比較研究序説」1982年12月 「日語教学」第20期
他に「中国語の中の日本語」、「司馬遼太郎とその歴史小説」、「森鷗外と魯迅」、「森鷗外の漢文」等

翻 訳：

司馬遼太郎『豊臣家の人們（豊臣家の人々）』1983年6月 北京・外国文学出版社
新田次郎『富士山頂雪蓮花（芙蓉の人）』1983年10月 江蘇人民出版社
他に、菊田一夫『君の名は』、及び『戦後日本小説選』等

はじめに

「共産党幹部指導社会主義市場經濟」という文は、すべて日本製漢語語彙でできているといったら、これらの語彙をさかんに使っている普通の中国人は信じかねるだろうし、これらの語彙の原産地の日本人も、たぶん半信半疑だろうが、しかし、それは事実である。私が十年前にこれまでの先行研究をふまえてまとめた「中国語の中の日本語」は、その間の消息を伝えている。

現在、日本語は毎年一万語（その多くは音訳による外来語だろうが）のペースで新語が増えているそうである。ところが、二千年の長きにわたって中国語の中に入った外来語は、たったの一万語にすぎない。そして、そのほぼ一割に当たる千語の外来語は、日本製漢語語彙なのである。

千語ぐらいといえば、多くはないと思われるかもしれないが、しかし、ほかの九割には「仏陀」など、仏教からの外来語が多く、死語に近いものがかなりあるし、日本語来源の語彙のほとんどは現代生活に欠かせない基本的概念であり、使用頻度の高いものであり、しかも造語力のあるものが多い、ということを考える、現代中国語における日本来源語の影響が非常に大きいといわねばならない。

「中国語の中の日本語」は最初は雑誌「カルチャー千葉」（八七年冬、第十四号）

に発表されたが、のちに日本国際交流基金の英文誌「The Japan Foundation Newsletter」(八八年四月号)に転載されたことがある。それからほぼ十年間立っている。この十年間の間にも少なからぬ日本製漢語が中国語の中に導入されている。例えば、カラOK(カラオケ)、通勤、放送、民宿、物業、福祉、営業中、単身貴族、日本料理などがそうである。

今回(九六年十二月十七日)、日文研第91回フォーラムとして私はまたこの「中国語の中の日本語」の話をした。発表の場所が京都市内から急に交通の便の悪い日文研に変わったし、その日はあいにく雨が降っていて、肌寒い日だった。常連の聴衆もたぶんあまり来てくれず、十数人も集まればいいと、コモンスルームで当フォーラムのコメンテーターの芳賀徹先生と話合っていた。ところが、教室に入っていたら、意外に満員だった。日文研研究協力課が後でまとめた報告によると、参加者はいままでの平均を上まわる九一人あり、西京区の住人はその一割にも満たず、聴衆の多くは、遠路はるばる滋賀県や京都府、大阪府から来たのである。このことは中日文化交流に寄せる日本の一般民衆の関心の高いことを示しているかと思われる。

発表が終わって教室の廊下で、ある年配の方が私にこう話してくれた。「私た

ち日本は中国からたくさんものをいただいた。陳先生のお話で、日本も恩返しとして千語ぐらいの言葉を中国にさしあげていることを知り、ほっとした。とてもうれしかった。」これはおもしろい話だなと、私は、心に微笑を禁じ得なかった。

この方の感想はあるいは聴衆たちの共通の気持ちをあらわしたものかも知れない。

しかし、実際のところ、国際的交流の場合、先進国から後進国へ伝えていくものが相対的に多いということは、一般的な法則だと思われるが、しかし、それは決して一方通行にはならず、お互いに利益になるところがあると思う。中日両国は一衣帯水の近隣であって、大昔から交流がさかんであった。古代においては、主として日本が中国に学んだが、近代になると、中国が日本にいろんなものを学び取った。「中国語の中の日本語」は、その一例に過ぎないのだろう。そして今は中日交流の新時代に入り、第三のピークを迎えてお互いに学び合っているのである。中華料理がどんどん日本の家庭に進出し、カラオケが中国の都会で大流行していることはそのあらわれだといえよう。

ところで、私の発表が終わってまもなく、当フォーラムの司会者であり、日文研究協力専門官の臼井祥子先生から、聴衆からの希望もあり、発表の記録としてもぜひ小冊子を刊行したいというご要望があった。私は喜んでそれに応じるこ

とにした。一つは時々友人からほしいといわれて、その都度その都度コピーをしなければならなかったが、小冊子ができると、その手間が省ける。二つは私の日文研での記念にもなる。もう一つはもっと大事なことだが、日本の皆様が拙文で中日文化交流の一端を知るのに役に立つことができれば、さいわいだと思うからである。それで、この「はじめに」をつけるとともに、もとの文章をすこし訂正、補足した上で関係の方に手わたした。ただ、印刷上の便宜を図って、文章中に出てくる中国語の用例は中国現行の略字を使わず、日本現行の漢字で間に合わせた。この点、読者の承諾をお願いする次第である。

陳 生保

一九九六年師走
日文研ハウス301室にて

一、日本留学ブーム

日本語のなかに古代の中国語から来た語彙がいっぱいある。それと同じように、現代中国語にも日本語がたくさん入って住みついている。これらの日本語は十九世紀の末ごろから中国語のなかに入ったのである。

清の末期、中国の国勢が急速に衰えた。特に鴉片戦争以後、中国は各列強の侵略の対象となり、次第に半ば殖民地化していった。中国人は亡国の危機感に襲われ、愛国の志士たちは、痛ましい現実を目ざめて、国を救う道をさがし求めている。隣国の日本が明治維新後まもなく資本主義の軌道に乗るようになったのを見て、康有為・梁啓超を代表とする中国の一部のインテリが、中国も日本に倣って維新することを主張し出した。一八九八年に起こった戊戌変法は、ほかでもなく日本の明治維新の影響によるものだったのである。戊戌変法は結局失敗に終わったが、その指導者の一人である梁啓超が日本に亡命し、横浜で新聞『清議報』と雑誌『新民叢報』を出版し、続けて中国の維新を鼓吹した。そして、彼の新聞、雑誌には日本の事が盛んに紹介され、日本語の語彙がたくさん使われていた。梁氏はまた『日本語を学ぶ利益を論ず』という文章をしたためて、中国人に日本語を

学び、日本の本を読むように呼びかけたのである。

第一陣の中国留学生が日本入りしたのは、一八九六年のことで、十三名だった。それが年とともに増えた。

例えば 一九〇一年 二八〇名

一九〇四年 一三〇〇名以上

一九〇五年 八〇〇〇名

統計によると、八千名は最高記録だったがこうした日本留学ブームは一九三七年の、中国に対する日本帝国主義の全面的な侵略戦争の爆発まで続いた。一九三六年六月一日当時の在日中国留学生は五八三四人だったが、戦争開始後、みな中国に引き揚げた。一八九六年から一九三七年までの足かけ四十二年の間における中国人の日本留学生の数は、合わせて六一二三〇名に達している。そのなかで学校を卒業したものは一一八一七名である。

当時の中国では、西洋への留学生も多かったが、なにしろ日本は距離的に近しい、西洋より生活費が低しいし、風俗習慣も似ているから、日本に留学する人が特に多かった。そのほかにいわゆる「同文同種」というのも、大きな原因となっていたようである。「同文」といっても、もちろん中国語と日本語がまったく同じ

言葉だという意味ではなく、中国も日本もみな漢字を使っているということだろう。しかし、それにしても、明治時代の日本語には実にたくさんの漢字が使われていた。「てにをは」などの助詞をのぞいては、名詞、動詞、形容詞はいうまでもなく、副詞などもほとんど漢字で綴られているので、中国人には親近感を与えるばかりでなく、とても便利だった。梁啓超は『日本語を学ぶ利益を論ず』の中で次のようにいっている。

「日本語が話せるようになるには、一年間かかるだろう。日本の文章が書けるようにするならば、半年でけっこうである。日本文が読めるだけで良ければ、数日でいちおう出来、数ヶ月で十分である。」

つまり日本語は速成できるという。そして当時の中国留学生によって「和文漢読法」という日本語の速成法が發明された。それは「同文」という利点を生かしながら、中国語と日語の相違点に力を入れるという学習法とも言えよう。文法的に見て、日本語が中国語といちばん違っているところは、二つある。一つは、いろんな語に付けたして文における語の身分と意味を決定する日本語の助詞・助動詞が中国語にはないということ。もう一つは、日本文における動詞と客語の語順が中国語のそれと正反対だということ。したがって、助詞、助動詞などの働き

を勉強した上で、文の中の主語を見つけ出し、文の終りにある動詞を見つけ出し、動詞の上にある客語を見つけ出して、頭の中で中国語の語順におきかえれば、大体の意味がつかめるわけである。このような、いわゆる「和文漢読法」は、日本人が漢文を読むとき、「返り点」を使ったり、「てにをは」を付けたしたりするのと、共通点があるかと思う。

余談だが、中国では英語を学ぶ人口は一番多いが、二番目は日本語である。日本語を勉強する動機もいろいろあるだろう。しかし、日本語の中に漢語がいっぱいあるから、学びやすいと思う人も少なくないようだ。特に大学で第二外語として選ぶ場合は、そういう傾向が強いように思われる。小生が日本で二年間中国語教育にたずさわった経験から見て、日本の大学生も同じ動機で中国語を第二外語として選ぶケースが少なくないように見える。しかし、中国語と日本語はたいへん異質な言語である。中国人も日本人も相手国の言葉を勉強して行くうちに、だんだんとその難しさを思い知らされるのが常である。そういう意味では上述の梁啓超氏の見方はやや皮相的なものだといわねばならない。

二、日本書の翻訳ブーム

大勢の中国留学生が日本に来了。彼らはみなはっきりした使命感を持っている。それはつまり明治維新後の日本に学ぶと同時に、日本を通じて西洋文明を祖国に紹介するということである。したがって彼らは短期間の速成的日本語教育を受けたのち、ただちに日本書の翻訳に取り組み、それを日本でまたは中国国内に送って出版した。中国国内でも日本書の翻訳ブームが起きていた。当時翻訳された書物は政治、経済、哲学、宗教、法律、歴史、地理、産業、医学、軍事、文学、芸術など、マルクス・エンゲルスの『共産党宣言』^④から川口章吾の『ハーモニカ吹奏法』まで、社会科学と自然科学のあらゆる分野にわたっている。一九四五年日本国際文化振興会によって出版された実藤恵秀氏の『中訳日文書目』によると、合計二六〇〇点あるそうだ。当時留学生たちは翻訳の組織をつくり、『譯書彙編』や『游学譯編』などの雑誌を出版し、単行本を出版した。日本の中学校の教科書をかたっぱしから訳すという「教科書譯輯社」という団体までできていた。留学生の翻訳事業が起ると、それを出版するための出版社もいろいろできた。日本には梁啓超関係の広智書局、湖南留学生による湖南編譯社、福建留学生による

閩学などがあつた。中国では最大の出版社、商務印書館もたくさんの訳書を出版した。

文学、芸術関係の訳文、訳書を例に見てみよう。一八九八年、中国の維新をめざす戊戌変法が失敗したあと、梁啓超は、秘密裡に日本の軍艦に乗って日本へ亡命する途中で、東海散士の『佳人之奇遇』という政治小説を訳した。これは日本の近代文学が中国に紹介されるスタートであった。それから一九四八年新中国が成立する前夜まで、約五十年間のあいだに日本から中国語に訳された小説、戯曲、文芸理論などをふくめて単行本だけで二五九点あり、新聞や雑誌に発表された訳文は五一一編に達している。訳された作者の名前を見ると、ほとんど当時の日本文壇で活躍した作家を網羅した観がある。たとえば武者小路実篤のものは、はじめ魯迅が『ある青年の夢』を訳し、中国の読書界に歓迎されたため、十数種の作品が訳された。そして上海は訳書出版の中心地だった。

《注》Ⅱ中国で最初に出版された『共産党宣言』は、日本語版から翻訳されたのである。訳者は、今は亡き元上海復旦大学学長・陳望道氏である。

三、日本語が中国語の中になだれ込む

おびただしい日本の本が中国語に訳され、出版される一方、他方では留学生たちが日本書を読んだ影響で自分の文章にたくさん日本語を引用した。そのほかに当時の日本は中国、とくに上海で多くの新聞・雑誌を刊行していた。こうして大量の日本語が中国語のなかにどっと入りこんだ。もちろん日本語といっても日本語の語彙が主で、表現法も少々入った。

一九一九年の「五四運動」前後の中国は激動のさなかにあった。中国語の書きことばも古代漢語だったところから、いわゆる白話文（話しことば）を主とする現代漢語へ脱皮する時期だった。「五四」以後の中国文壇の作家の多くは日本留学生だった。中国新文学運動の主将である魯迅をはじめ、郭沫若、郁達夫、田漢、夏衍など、たくさんいた。まさに今は亡き郭沫若氏が一九五五年中国学術代表団の団長として来日した時、早稲田大学で行った講演で述べているように、「中国文壇の大部分は日本留学生がつくりあげたのである。創造社の主要な作家は日本留学生であり、語絲派も同様である。……中国の新文芸はすっかり日本の洗礼を

受けている」。こうした日本留学生出身の作家たちは好んで、自分の文章、作品のなかに日本語の語彙や表現法を借りて使った。魯迅は大文豪であり、中国新文芸のリーダーであった。彼は青年時代、日本に留学し、はじめは東京の弘文学院で日本語を学び、のちに仙台の医学専門学校で医学を勉強した。魯迅は古い中国語ではもう不十分だから、外国語から必要なことばをどんどん取り入れるべきだと強く主張した。彼の作品は、内容から見てもことばから見ても非常に中国的であるが、しかし、彼の文章にも日本語からとり入れたことばが少々ある。例として「万年筆、日傘、人力車、定刻、構想、直面、車掌、残念、夕方、丸、時計、名所、写真」などが挙げられる。

大量の日本語が中国語のなかに入ったことに対し、中国人のなかには、賛成する人もあれば、反対する人もあった。梁啓超は賛成派である。彼は自分の文章のなかでたくさん日本語を使った。それでも彼は日本人がつくった「経済」と「社会」という二つの訳語がどうしても気に入らず、別のことばでそれにとってかわるべきだと強く主張した。当時もう一人の翻訳大家の嚴復は、西洋語を直接に音訳するか、または中国の古典の書物からそれ相応の、あるいは近い意味のことばを見つけ出して訳語として使う方が良いと主張した。さらに日本からことば

を輸入することに断乎反对する人もいた。例えば、彭文祖がその一人である。彭は日本留学生で、一九一五年に『盲滅法な新語』という本を出版した。その中で彼は日本からの新語の導入のことを「民族の存亡と係りある大事だ」とし、日本語の大量導入を「恥知らずな行為だ」と罵り、「そういう人たちの首をばっさりと一刀の下に切ってしまいたい」とさえ言った。

さて、はじめのころは、日本の訳語と厳復らがつくった訳語が共存した。例をあげてみよう。

「Economics」という英語は日本語で「経済学」と訳されているが、それにはとても抵抗を感じたようである。なぜなら「経済」ということばはもとと中国の古語であり、「経世済民」の意である。「経世済民」とは世の中を治め、人民の苦しみを救うことである。現代語におきかえるならば大体「政治」という語に相当するからである。現に竹下登前首相の「経世会」は「経世済民」という言葉をふまえたように思われる。いうまでもなく、それは政治家のグループであって、経済の組織ではない。そのため厳復は「計学」と訳し、梁啓超は「資生学」または「富国学」「平準学」という訳語を使った。ちなみに「平準」は『史記』に出ている言葉で、物の安いときに官が買い入れ、高いときにそれを売り出して物価

を調節する制度で、前漢の武帝に始まる。そのほか「哲学」(Philosophy)は「理学」「智学」と共存し、「社会学」(Sociologie)(仏語)は「群学」と共存した。そのほか挙げてみよう。

物理学―格致学 地質学―地学 鉱物学―金石学 雑誌―叢報

社会―人群 論理学―名学 原料―天産之物 功利主義―樂利主義

ところが、嚴復らの自作新語の大部分は、日本の訳語ほど良くなかった。というのは、かれらの訳語は古典から来たものが多くてわかりにくかったため、流行しなかったからである。今からふりかえってみれば、嚴復らのやりかたには、そもそも無理があった。ことばは社会実生活の反映である。中国語に入った西洋の新語はもとと中国社会になかった事物である。古い中国語からそれ相應の語をさがし出すのは、なんといっても無理な話である。ない袖が振れぬとはこの事だろう。したがって日本の訳語と嚴復らの訳語が一時期共存はしたが、結局のところは日本訳語の勝ちとなり、嚴復らの訳語は、姿を消してしまった。のちに梁啓超も「経済学」「社会学」ということばを使わざるを得なくなった。当時、日本の訳語を借りて西洋の新語を導入することが逆らうことのできない趨勢だったといえよう。今では「経済、社会、哲学」などの日本訳語はもうとくに現代中国

語のなかに住みつき、帰化している。それが日本からの外来語だということを、ほとんどの中国人はもう知らないのであり、「計学、資生学、群学」などのことばが昔「経済学、社会学」と共存した事実はなおさら知らないのである。

日本語が中国語のなかになだれこむ背景には、中国が西洋の新語を積極的に輸入する事情があるほかに、当時日本における新語のつくり方にも原因がある。当時の日本では、西洋の新語を訳すとき、少数の音訳をのぞいて大部分は意識をしていた。しかも音訳であろうと、意識であろうと、みな漢字を使っていた。特に意識の場合は、ちゃんと中国語の造語法のルールを守ってつくられた。具体的には次の通りである。

一、修飾語＋被修飾語

① 形容詞＋名詞

例Ⅱ 人權	金庫	特權	哲学	表像	美学	背景	化石	戦線	環境
芸術	医学	入場券	下水道	公証人	分類表	低能児			

② 副詞＋動詞

例Ⅱ 互恵	独占	交流	高圧	特許	否定	肯定	表決	歓送	仲裁
妄想	見習	假釈	假死	假設					

二、同義語の複合

例Ⅱ 解放 供給 説明 方法 共同 主義 階級 公開 共和 希望

法律 活動 命令 知識 総合 説教 教授 解剖 闘争

三、動詞＋客語

例Ⅱ 断交 脱党 動員 失踪 投票 休戦 作戦 投資 投機 抗議

規範 動議 処刑

四、上述の語による複合語

例Ⅱ 社会主義 自由主義 治外法権 土木工程 工芸美術 自然科学

自然淘汰 攻守同盟 防空演習 政治経済学 唯物史観 動脈硬化

神経衰弱 財団法人 国際公法 最俊通牒 経済恐慌

要するに、日本人は西洋のことばを日本語に訳すとき、漢字を使って中国語の造語法の法則にしたがって訳語を苦心慘憺してつくったと言える。特に第三の「動詞＋客語」の造語法は日本語にはもとともないばかりか、日本語の文法とは正反対である。こうしてできた日本の訳語が大量中国語のなかに入っても、中国人はちよつと見知らぬことばだなと思うことがあったかもしれないが、あまり違和感を持たなかったにちがいない。まるで日本生まれ日本育ちの華僑の人が中国

に帰国したようである。もしも当時、戦後の日本のように外来語は全部片仮名の音訳で片づけてしまうならば、日本語の中国語への大量進出はありえなかっただろうと思う。

日本語が中国語に入る時から定着までは一つのプロセスがあった。最初は中国人になじみがないので、そういう語に注釈がつけられたりした。梁啓超の文章から一、二例を挙げてみよう。

①「今西人製造物品之原料（即天産之物）……」

②「希臘^{ギリシャ}之地形半島也（三面環海、一面連陸者謂之半島）。」

またもっぱら日本語から新語を収集する語彙集や辞書類も多種類出版された。第一陣の留学生が来日する一八九六年から新中国が成立する一九四九年まで、五十年あまりの歳月が過ぎたが、日本からの新語はもうすっかり中国語のなかにとけこんだと言える。

四、日本来源の語に対する研究

清の末期、日本留学ブームがでてから、日本語の語彙集、辞書類、教科書などが数多く出版されたとはいえ、中国語の中の日本語に対する研究が本格的に行われるようになったのは、新中国になってからである。つまり中国語の規範化と文字改革を進めるために、中国語の中の外来語を今後どうするかという問題に直面したのである。そのためにはまず中国語の中の外国語の状況を明らかにする必要があった。一九五八年、中国の有名な言語学者高名凱・劉正琰の『現代漢語の中の外来語研究』、王立達の『現代漢語中日本語から借りて来た語彙』を皮切りに、中国語の中の外来語が研究され、一九八四年には『漢語外来語辞典』が出版された。次に、私が読んだ範囲で今までの研究成果をまとめて報告しよう。

まず数のことだが、日本語の語彙がどれくらい中国語に入っているのか。学者によって統計の数字が少し違うし、中国元来の語または中国人が作った訳語か、それとも日本でできたものか、区別のつかない語も一部あるが、大体千語ぐらい入っている。『漢語外来語辞典』には、一万あまりの外来語が収められているが、それは二千年ぐらいの間に中国語に入った外来語全体である。数からいえば日本

語は約一割を占めているに過ぎないが、しかし、総数一万あまりの外來語には、遠い昔ペルシャ（現在のイラン）、印度及び西域から入った「獅子、葡萄、琵琶」などの語のほか、「仏陀」などの仏教用語がたくさんあり、その多くはもう死語か、あまり使わない語になっている。それに対し、日本語は最近五十年間にどっと入ったものだし、ほとんどは常用語として中国語に定着している。

第二に近代になって中国語に入った新語のほとんどは日本語からである。西洋から直接入ったものもすこしあるが、それは全部名詞であり、しかも現在あまり使わないものが多い。日本語から入ったものは、名詞だけでなく、動詞もある。例えば「服従 復習 支持 分配 克服 支配 配給」などがそうである。また、自然科学や社会科学の基本概念も多くは日本語から来ている。例えば「哲学 心理学 論理学 民族学 経済学 財政学 物理学 衛生学 解剖学 病理学 下水工学 土木工学 河川工学 電気通信学 建築学 機械学 簿記 冶金 園芸 和声学 工芸美術」など。

第三に、日本來源の語は、現代中国語における使用頻度が非常に高い。一九六〇年、中国の『文字改革』という雑誌に『二音節基本語の出現頻度統計表』が載っているが、それは中国で広く読まれている刊行物『紅旗』『人民日報』『光明日報』

及び高校の国語教科書などを対象に調査した結果である。それによると、二二八五の二音節基本語のなかで出現頻度五〇〇以上の語は八八語あるが、そのうち日本語から来たものは二八語で、三一・八%、およそ三分の一を占めているというわけである。

第四に日本来源の語は、常用語としての名詞、動詞、自然科学と社会科学の基本概念ばかりでなく、造語の力を持つ接尾語のような語が二三もある。これらの語は現代中国語で幅広く活躍している。各々例を挙げてみる。

- (1) 化—一元化 多元化 一般化 公式化 特殊化 大衆化 自動化 電氣化
現代化 工業化 民族化 科学化 機械化 長期化 口語化 理想化
- (2) 式—速成式 問答式 流動式 簡易式 方程式 恒等式 西洋式 日本式

旧式 新式

- (3) 炎—肺炎 胃炎 腸炎 関節炎 脳炎 気管炎 皮膚炎 肋膜炎
(4) 力—生産力 消費力 原動力 想像力 労働力 記憶力 表現力 支配力
(5) 性—可能性 現実性 必然性 偶然性 周期性 放射性 広泛性 原則性
習慣性 伝統性 必要性 創造性 誘惑性
- (6) 的—歴史的 大衆的 民族的 科学的 自然的 必然的 偶然的 相対的

絶対的 公開的 秘密的

(7) 界——文学界 芸術界 思想界 学术界 金融界 新聞界 教育界 出版界

宗教界 体育界

(8) 型——新型 大型 中型 小型 流線型 標準型 經驗型

(9) 感——美感 好感 惡感 情感 優越感 敏感 讀後感 危機感

(10) 点——重点 要点 焦点 注意点 觀点 出发点 終点 着眼点 盲点

(11) 觀——主觀 客觀 悲觀 樂觀 人生觀 世界觀 宇宙觀 科學觀 直觀

概觀 微觀(ミクロ) 宏觀(マクロ)

(12) 線——直線 曲線 拋物線 生命線 死亡線 交通線 運輸線 戰線

警戒線

(13) 率——効率 生産率 增長率 使用率 利率 廢品率 頻率

(14) 法——弁証法 歸納法 演繹法 綜合法 分析法 表現法 選舉法 方法

憲法 民法 刑法

(15) 度——進度 深度 广度 強度 力度

(16) 品——作品 食品 藝術品 成品 贈品 展品 廢品 半成品 記念品

(17) 者——作者 讀者 訳者 労働者 著者 締造者 倡導者 先進工作者

(18) 作用 — 同化作用 異化作用 光合作用 心理作用 精神作用 副作用

(19) 問題 — 人口問題 土地問題 社会問題 民族問題 教育問題 国際問題

(20) 時代 — 旧石器時代 新石器時代 青銅器時代 鉄器時代 原子時代

新時代 旧時代

(21) 社会 — 原始社会 奴隸社会 封建社会 資本主義社会 社会主義社会

中国社会 日本社会 国際社会

(22) 主義 — 人文主義 人本主義 人道主義 自然主義 浪漫主義 現実主義

虚無主義 封建主義 資本主義 帝国主義 社会主義 排外主義

復古主義

(23) 階級 — 地主階級 資産階級 中産階級 農民階級 工人階級 無産階級

中国語のなかに入った日本語を分析してみると、次の通りである。

(一) 日本で音訳された西洋語だが、漢字で表されているもの。

gas 瓦斯 concrete 混凝土 romantic 浪漫 club 倶楽部

lymph 淋巴 cholera 虎列刺

(二) 古代漢語のことはばを利用して訳したものだが、本来の意味とは違うもの。

(1) 組織 — もととは糸を組んで機を織ること、つまり紡績の意。

(2) 雑誌——本来はさまざまな事を書きしるすこと、つまり雑記の意。

(3) 労働——本来は運動の意。

(4) 社会——本来は村の祭日に村人が会合すること、つまり集会の意。

(5) 経済——本来は經世済民の意。

(6) 人道——本来は夫婦間の交わり、または人として守るべき道德の意。

(7) 革命——本来は天命が改まって王朝が変わる意。易性革命。

そのほかにまた「索引 意味 共和 形而上学 憲法 唯心 唯物 地

主 知識 保険 生産 權利 歴史 民主 作用 積極 絶対」などがある。しかし、「化学」と「文法」という二つの語は中国人の丁韞良がつくった訳語だそうである。「文法」は中国の古語にもあり、本来は法律の条文の意である。

(三) 現有の漢字を使って日本で新しく組み合わされてできた語。これは新語の中の大半を占めている。例を挙げてみる。

入口 出口 広場 手続 取締 打消 取消 引渡 場合 見習 但書
味之素

以上はみな訓読で読むことばである。

高潮 低潮 直接 間接 広義 狹義 主体 客体 主観 客観 肯定
 否定 時間 空間 理性 感性 右翼 左翼 直流 交流 暖流 寒流
 動脈 静脈 優勢 劣勢 長波 短波 内在 外在 予算 決算 可決
 否決 動態 静態 質量 数量 動力 静力 熱帯 寒帯 温帯 動産
 不動産 上水道 下水道 地上水 地下水 内分泌 外分泌 重工業
 軽工業 陽極 陰極 債権 債務 流通資本 固定資本
 右はみな音読の、相対的な、または相反の意味のことば。そのほかにまた
 次のような語がある。

石油 出版 方案 方針 正当 政策 保健 保証 理事 幹事 系統
 伝統 闘争 協定 協会 協議 社交 社団 批判 企業 投資 広告
 景気 法則 範疇 道具 劇場 象徴 抽象 具体 前提 揚棄 活動
 運動 講座 典型 版画 性能 計画 派遣 細胞 電流 電池 電波
 結核 科学

(四) 日本でつくられた漢字。

腺 癌 吋 呎 哩 噸

(五) 日本語だが、中国語に入ってから意味が変わっているもの。

(1) 労働者―はじめは本来の意味で使われたが、のちに「工人」という語にとってかわられ、今では「働くもの」の意味で使われている。

(2) 辨護士―「律師」という語に取って変わられ、今では法律用語ではなく、ただ弁護する人の意味である。

(六) 組合―はじめは「労働組合」がそのまま使われたが、今では「工会」という語に取って変わられた。「組合」という語もあるが、組合わせの意になっっている。

(七) 日本語を訳すために中国で作られた新語。

(1) 基於 (○○に基いて)

(2) 關於 (○○に關して)

(3) 對於 (○○に對して)

(4) 由於 (○○に由って)

(5) 認為 (○○と認める)

(6) 成為 (○○と成る)

(7) 視為 (看做) (○○と看做す)

(七) 中国語に入ったが、のちに淘汰された語

例えば、万年筆 日傘 車掌 残念 夕方 相場 支那 手形 切手

五、中国語に与えた日本語の影響

今から四十五年前の一九四二年、中国共産党の指導する抗日戦争の根拠地の延安では、「整風運動」といって党の作風を改善する運動が行われた。毛沢東主席がそのとき「党八股（共産党の文章の缺点）に反対する」という演説を発表したが、その中で、表現を豊かにするためには、第一に人民大衆のことに学ぶこと、第二には外国語から学ぶこと、第三には古典から学ぶことを呼びかけている。外国語から学ぶことについて次のようにいっている。

「第一には、外国語のなからわれわれに必要なものを取り入れる。われわれは外国語をむりに輸入したり、濫用してはいけませんが、外国語のなかの、良いもの、われわれが利用できるものはとり入れる必要がある。中国語は、語彙が十分でないから、現在、われわれの語彙のなかには、外国からとり入れたものが、たくさんある。たとえば、今日開いている、この幹部会、この「幹部」という語は、外国から学んだものである。われわれは、もっと多く、

外国の新鮮なものをとり入れなければならない。かれらの進んだ道理をとり入れるだけでなく、かれらの新鮮な用語も、とり入れなければならない」。

ここでいっている「幹部」という語は外国から学んだもの」とは、疑いもなく「日本から」ということである。

日本語が中国語にたくさん入ったといっても、主として自然科学と社会科学の新語である。生活用語には、中国固有のものが多く、日本からはあまり来ていない。

例を挙げてみよう。故毛沢東主席には有名な論文『実践論』がある。次はその一節である。

「マルクス以前の唯・物・論は、人の社会性を無視し、人の歴・史的・発展を無視したもので、認識問題を観察した。それがために、認識と社会実践との依存関係、すなわち、生産と階級闘争にたいする認識の依存関係を了解することができなかった。

まず第一に、マルクス主義者は、こう思う：人類の生産活動は、最も基本的な実践活動であり、その他のすべての活動を決定するものである。人の認識は、主として、物質の生産活動に依存し、しだいに、自然の現象・自然の

性質・自然の法則性・人と自然との関係を了解する、そのうえ、生産活動をとおして、各種の、ことなる程度で、しだいに、人と人との、一定の相互関係を認識する。これら一切の知識は、生産活動をはなれては、得ることが、できない。階級のない社会では、どの人も、社会の一員という資格で、その他の社会のメンバーと協力し、一定の生産関係を結び、生産活動に従事して、人類の物質生活の問題を解決する。いろいろな階級社会では、各階級社会のメンバーは、やはりいろいろ、ちがった方式で、一定の生産関係をむすび、生産活動に従事して、人類の物質生活の問題を解決する。これが、人の認識発展の基本的な、みなもとである」。

傍らに・のある語は日本来源のものである。四分の一ぐらいのことばが日本からのものである。中国の憲法にも日本来源の語がたくさんあるし、その他の社会科学、自然科学関係の論文にも大体同じ傾向が見られる。

こういうことがあるから、中国人が日本語を勉強する場合、発音段階を終えて、基本的文法をいちおう学習したら、毛沢東の『実践論』のような理論文が読めるようになる。それは理論文の中に中国語に定着した日本語がいっぱいあるからである。しかし、逆に大和言葉の多い日本の小学生の国語教科書や童話を読むのは

むずかしい。中国語を学ぶ日本人にも同じケースがあると聞いている。これはなかなかおもしろいことだ。なぜなら、普通、外国語、例えば英語を勉強するばあいは、生活文より理論文の方がずっとむずかしいからである。

現代中国語に対する日本語の影響について高名凱氏は『現代漢語のなかの外来語研究』で次のように述べている。

「現代漢語の語彙に対する日本語の影響はたいへん大きい。現代漢語における外来語の主要なるものは日本語から来ている。日本語は漢語外来語の最大の源だといっても過言ではないだろう。おびただしい数にのぼる西洋語のほとんどは、日本語を通じて現代漢語の中に導入されたのである」。

その影響を具体的にいうと、次の三点が挙げられる。

(一)、中国語の語彙の複音化のテンポを早めた。

中国の古代語（日本でいう漢文）にも、二つまたは二つ以上の文字でできた語彙も少々あることはあるが、非常に少ない。ほとんどは一つの文字が一つの語彙になるのである。語彙の複音化、つまり二つまたは二つ以上の文字で一つの語をつくることは、中国語が古代語から現代語へ脱皮する過程での趨勢だが、日本語をはじめとす

る外来語の進出によってその脱皮のテンポが早められたといえる。

(二)、語の複音化によって語義が細くなり、表現がいつそう緻密になり、正確になった。

例えば、「行」という語は古語では「行く」「走る」「行為」「行動」

「行進」などの意を有する多義語だったが、現代漢語では複音化によって、いくつかの語ができ、表現がもっと的確になった。

(三)、西洋的な表現がたくさん入り、中国語のセンテンスが長くなった。

新語の大量導入、語の複音化と表現の緻密化、長文の活用など、これらはいずれも古代漢語から現代漢語への脱皮であり、中国語の進歩である。こうした中国語の進歩は、世界各国の進んだ文化の吸収、はては中国の現代化実現に役立つものであろう。

一八九六年第一陣十三名の中国留学生が来日したときから数えて、今年はいちように百周年に当たり、関西などでは日本滞在中の中国人留学生を中心に「中国人日本留学百周年」の記念行事が行われた。そして千語あまりの日本語はすっかり中国語のなかに定着し、帰化して、現代中国語のなかの不可欠の構成部分となっている。「共産党、幹部、社会主義、経済、手続」などの

ことばは、中国人なら誰でもよく使うものだが、しかし、ほとんどの人はもうその来源を意識しないし、それを知らないのである。

日本語の場合も同じようなことがある。辞書によって多少差はあるが、日本語の語彙は、今でも半分ぐらいは漢語語彙だそうである。その大部分は古代中国語から来たものであり、その一部分は日本でつくられたものである。

しかし、日本人は中国来源の漢語語彙を外来語だと、まったく見なししていないし、それが中国からのことばだと意識する人も、非常に限られているだろう。これはなんと不思議な現象だろう。

もう一つおもしろいことがある。同じ書き方のことばでも、その読み方は中国人と日本人でぜんぜん違う。例えば「哲学」ということば―これはギリシャ語「Philosophia」の意識語だが、中国人は「zheque」と読み、日本人は「Tetugaku」（てつがく）と読む。読み方がそれぞれ違っていても、同じ意味で理解する。そして中国人も日本人も、それを外来語と見なさない。こういう現象は、たぶん漢字文化圏内、とくに中日両国間にしかないものであろう。以上述べたことは、中日両国間の文化交流の歴史の長いことと影響の深いことを、あますところなく立証していると思う。（了）

〈主要参考文献〉

- (1) 高名凱・劉正琰『現代漢語のなかの外來語研究』（一九八二年二月 中国文字改革出版社）
- (2) 王立達『現代漢語中、日本語から借りて來た語彙』（一九八二年三月 雜誌『中国語文』）
- (3) 北京師範大学中文系漢語教研組『五四以來漢語書面語の変遷と發展』（一九九一年 商務印書館）
- (4) 周祖謨『漢語語彙』（一九九一年八月 人民教育出版社）
- (5) 実藤恵秀『中国人・日本留学史』（一九七〇年 くろしお出版社）
- (6) 実藤恵秀『近代日中交渉史話』（一九七三年 春秋社）
- (7) 譚汝謙『中国語のなかの日本語・補遺』（実藤恵秀『近代日中交渉史話』の附録）
- (8) 劉正琰・高名凱・麦永乾・史有為『漢語外來語辞典』（一九八四年十二月 上海辞書出版社）
- (9) 符淮青『現代漢語語彙』（一九八五年 北京大学出版社）
- (10) 王凌『中国における日本近代文学の翻訳』（遼寧大学学报）一九八二年第三号）
- (11) 武殿勲・高文達『魯迅の作品のなかの日本語について』（山東師範学院学报）一九八二年第壹号）
- (12) 北京大学アジア・アフリカ研究所『中国における日本文学翻訳編目』（一九九一年四月）

発表を終えて

長江デルタ地帯に生まれ育ち、華北平野の北京で青春時代をすごした私はこれまで山とのつきあいが非常に少なかった。今回日文研ハウスの301室に入居してから毎日朝から晩まで山とつきあっている。李白の句に倣ってこのような句をならべてみた。

相看兩不厭	相 ^あ い ^み 看 ^て	両 ^{ふた} つながら ^あ 厭 ^き さざるは
只有大枝山	只 ^{ただ} だ有り	大 ^{おお} 枝 ^え 山 ^{やま}

それから誰の句か忘れたが「窓を開けば、山の影を納め、枕を推せば溪声を得る」を思い出した。まさに日文研ハウスのため、つくられた詩句のように思われる。

ところで「陳さんは毎日山ばかり見ていて、学問はしないのか」と聞かれるかもしれないが、学問は適当にやっていると答えたい。学問をするというよりも毎日充電しているといったほうがいいだろう。すでに読みたい本を20冊ぐらい読んだし、このフォーラムのほかに大阪市民講座では上海の話、日本語教育学会ではパネリストとして中国の日本語教育の話をした。

そろそろ論文の執筆を始めなければならないと思っている。

陳 生 保

日文研フォーラム開催一覧

回	年月日	発表者・テーマ
1	62.10.12 (1987)	アレッサンドロ・バロータ (ピサ大学助教授) Alessandro VALOTA 「近代日本の社会移動に関する一、二の考察」
2	62.12.11 (1987)	エンゲルベルト・ヨリッセン (日文研客員助教授) Engelbert JORIß EN 「南蛮時代の文書の成立と南蛮学の発展」
③	63. 2.19 (1988)	リー A. トンプソン (大阪大学助手) Lee A. THOMPSON 「大相撲の近代化」
4	63. 4.19 (1988)	フォスコ・マライーニ (日文研客員教授) Fosco MARAINI 「庭園に見る東西文明のちがい」
⑤	63. 6.14 (1988)	宋 彙七 (慶北大学校師範大学副教授) SONG Whi Chil 「大塩平八郎研究の問題点」
6	63. 8. 9 (1988)	セップ・リンハルト (ウィーン大学教授) Sepp LINHART 「近世後期日本の遊び—拳を中心に—」
⑦	63.10.11 (1988)	スーザン J. ネイピア (テキサス大学助教授) Susan NAPIER 「近代日本小説における女性像—現実と幻想—」
⑧	63.12.13 (1988)	ジェームズ C. ドビンス (オベリン大学助教授) James C. DOBBINS 「仏教に生きた中世の女性—恵信尼の書簡—」

⑨	元. 2.14 (1989)	嚴 安生 (北京外国語学院日本語学部助教授) YAN An Sheng 「中国人留学生の見た明治日本」
⑩	元. 4.11 (1989)	劉 敬文 (遼寧大学日本研究所副所長) LIU Jingwen 「教育投資と日本の戦後経済高度成長」
⑪	元. 5. 9 (1989)	スザンヌ・ゲイ (オベリン大学助教授) Suzanne GAY 「中世京都における土倉酒屋－都市社会の自由とその限界－」
⑫	元. 6.13 (1989)	夏 剛 (京都工芸繊維大学助教授) HSIA Gang 「インタビュー・ノンフィクションの可能性－猪瀬直樹著『日本凡人伝』を手掛りに－」
⑬	元. 7.11 (1989)	エルンスト・ロコバント (東洋大学助教授) Ernst LOKOWANDT 「国家神道を考える」
⑭	元. 8. 8 (1989)	キム・レーホ (ソ連科学アカデミー・世界文学研究所教授) KIM Rekho 「近代日本文学研究の問題点」
⑮	元. 9.12 (1989)	ハルトムートO. ローターモンド (フランス国立高等研究院教授) Hartmut O. ROTERMUND 「江戸末期における疱瘡神と疱瘡絵の諸問題」
⑯	元.10. 3 (1989)	汪 向榮 (中国中日関係史研究会常務理事・日文研客員教授) WANG Xiang-rong 「弥生時期日本に來た中国人」
⑰	元.11.14 (1989)	ジェフリー・ブロードベント (ミネソタ大学助教授) Jeffrey BROADBENT 「地域開発政策決定過程を通してみた日米社会構造の比較」

⑮	元.12.12 (1989)	エリック・セズレ (フランス国立科学研究所助教授) Eric SEIZELET 「日本の国際化の展望と外国人労働者問題」
⑯	2. 1. 9 (1990)	スミエ・ジョーンズ (インディアナ大学準教授) Sumie JONES 「レトリックとしての江戸」
⑰	2. 2.13 (1990)	カール・ベッカー (筑波大学哲学思想学系外国人教師) Carl BECKER 「往生－日本の来生観と尊厳死の倫理」
⑱	2. 4.10 (1990)	グラント K. グッドマン (カンザス大学教授・日文研客員教授) Grant K. GOODMAN 「忘れられた兵士－戦争中の日本に於けるインド留学生」
22	2. 5. 8 (1990)	イアン・ヒデオ・リービ (スタンフォード大学準教授・日文研客員助教授) Ian Hideo LEVY 「柿本人麿と日本文学における『独創性』について」
23	2. 6.12 (1990)	リヴィア・モネ (ミネソタ州立大学助教授) Livia MONNET 「村上春樹：神話の解体」
⑳	2. 7.10 (1990)	李 国棟 (北京連合大学外国語師範学院日本語学部講師) LI Guodong 「魯迅の悲劇と漱石の悲劇－文化伝統からの一考察－」
㉑	2. 9.11 (1990)	馬 興国 (遼寧大学日本研究所副所長・日文研客員助教授) MA Xing-guo 「正月の風俗－中国と日本」
㉒	2.10. 9 (1990)	ケネス・クラフト (リーハイ大学助教授) Kenneth KRAFT 「現代日本における仏教と社会活動」

27	2.11.13 (1990)	アハマド M. ファトヒ (カイロ大学講師) Ahmed M. FATTHY 「義経文学とエジプトのベールバルス王伝説における主従関係の比較」
②⑧	3. 1. 8 (1991)	カレル・フィアラ (カレル大学日本学科長・日文研客員助教授) Karel FIALA 「言語学からみた『平家物語・巻一』の成立過程」
②⑨	3. 2.12 (1991)	アレクサンドル A. ドーリン (ソ連科学アカデミー東洋学研究所上級研究員) Aleksandr A. DOLIN 「ソビエットの日本文学翻訳事情－古典から近代まで－」
30	3. 3. 5 (1991)	ウイーベ P. カウテルト (ワーゲニンゲン大学研究員) Wybe P. KUITERT 「バロック・ヨーロッパの日本庭園情報 －ゲオルグ・マイステルの旅－」
③①	3. 4. 9 (1991)	ミコワイ・メラノヴィッチ (ワルシャワ大学教授・日文研客員教授) Mikołaj MELANOWICZ 「ポーランドにおける谷崎潤一郎文学」
32	3. 5.14 (1991)	ベアトリス M. ボダルト・ベイリー (オーストラリア国立大学リサーチフェロー・日文研客員助教授) Beatrice M. BODART-BAILEY 「三百年前の京都－ケンペルの上洛記録」
③③	3. 6.11 (1991)	サトヤ B. ワルマ (ジャワハルラル・ネール大学教授・日文研客員教授) Satya. B. VERMA 「インドにおける俳句」
34	3. 7. 9 (1991)	ユルゲン・ベルント (フンボルト大学教授・日文研客員教授) Jürgen BERNDT 「ドイツ統合とベルリンにおける森鷗外記念館」

③⑤	3. 9.10 (1991)	ドナルド M. シーキンス (琉球大学助教授) Donald M. SEEKINS 「忘れられたアジアの片隅－50年間の日本とビルマの関係」
③⑥	3.10. 8 (1991)	王 曉平 (天津師範大学助教授・日文研客員助教授) WANG Xiao Ping 「中国詩歌における日本人のイメージ」
③⑦	3.11.12 (1991)	辛 容泰 (東国大学校文科大学教授・日文研来訪研究員) SHIN Yong-tae 「日本語の起源 －日本語・韓国語・甲骨文字との脈絡を探る－」
③⑧	3.12.10 (1991)	洪 潤植 (東国大学校教授) HONG Yoon Sik 「古代日本佛教における韓国佛教の役割」
③⑨	4. 1.14 (1992)	サウィトリ・ウィシュワナタン (デリー大学教授・日文研客員教授) Savitri VISHWANATHAN 「インドは日本から遠い国か？－第二次大戦後の 国際情勢と日本のインド観の変遷－」
40	4. 3.10 (1992)	ジャン = ジャック・オリガス (フランス国立東洋言語文化研究所教授) Jean-Jacques ORIGAS 「正岡子規と明治の随筆」
④①	4. 4.14 (1992)	リブシェ・ボハーチコヴァー (プラハ国立博物館日本美術 元キュレーター・日文研客員教授) Libuše BOHÁČKOVÁ 「チェコスロバキアにおける日本美術」
42	4. 5.12 (1992)	ポール・マッカーシー (駿河台大学教授) Paul McCARTHY 「谷崎文学の『読み』と翻訳：アメリカにおける 最近の傾向」

43	4. 6. 9 (1992)	G. カメロン・ハーストⅢ (ニューヨーク市立大学リーマン 広島校学長・カンザス大学東アジア研究所長) G. Cameron HURST Ⅲ 「兵法から武芸へー徳川時代における武芸の発達ー」
44	4. 7.14 (1992)	杉本 良夫 (オーストラリア・ラトロブ大学教授) Yoshio SUGIMOTO 「オーストラリアから見た日本社会」
④⑤	4. 9. 8 (1992)	王 勇 (杭州大学日本文化研究センター教授・日文研 客員助教授) WANG Yong 「中国における聖徳太子」
④⑥	4.10.13 (1992)	李 栄九 (大韓民国中央大学教授・日文研客員教授) LEE Young Gu 「直観と芭蕉の俳句」
④⑦	4.11.10 (1992)	ウィリアム D. ジョンストン (米国・ウェスリアン大学助教授・日文研客員助教授) William D. JOHNSTON 「日本疾病史考－『黴毒』の医学的・文化的概念の形成」
④⑧	4.12. 8 (1992)	マノジュ L. シュレスト (甲南大学経営学部講師) Manoj L. SHRESTHA 「アジアにおける日系企業の戦略転換 －技術移転をめぐる－」
④⑨	5. 1.12 (1993)	朴 正義 (圓光大学校師範大学副教授・日文研来訪研究員) PARK Jung-Wei 「キリスト教受容における日韓比較」
50	5. 2. 9 (1993)	マーティン・コルカット (米国・プリンストン大学教授・日文研客員教授) Martin COLLCUTT 「伝説と歴史の間－北條政子と宗教」

⑤1	5. 3. 9 (1993)	清水 義明 (米国・プリンストン大学マーカンド荣誉教授) Yoshiaki SHIMIZU 「チャールズ L. フリアー (1854~1919) とフリアー美術館 ー米国の日本美術コレクションの一例としてー」
⑤2	5. 4.13 (1993)	金 春美 (高麗大学教授・日文研来訪研究員) KIM Choon Mie 「日本近代知識人の思想と実践ー有島武郎の場合ー」
53	5. 5. 11 (1993)	タキエ・スギヤマ・リブラ (ハワイ大学教授) Takie SUGIYAMA LEBRA 「皇太子妃選択の象徴性 ー旧身分文化との関連を中心としてー」
54	5. 6. 8 (1993)	姜 希雄 (ハワイ大学教授・日文研客員教授) H.W.KANG 「変革と選択 : 10世紀の日本と朝鮮 ー科举制度をめぐるー」
⑤5	5. 7.13 (1993)	ツベタナ・クリステワ (ソフィア大学教授・日文研客員教授) Tzvetana KRISTEVA 「涙の語りー平安朝文学の特質ー」
⑤6	5. 9.14 (1993)	金 容雲 (漢陽大学教授・日文研客員教授) KIM Yong-Woon 「和算と韓算を通してみた日韓文化比較」
⑤7	5.10.12 (1993)	オロフ G. リディン (コペンハーゲン大学教授・日文研客員教授) Olof G. LIDIN 「徳川時代思想における荻生徂徠」
⑤8	5.11. 9 (1993)	マヤ・ミルシンスキー (スロベニア・リュブリアナ大学助教授・日文研客員助教授) Maja MILČINSKI 「無常観の東西比較」

59	5.12.14 (1993)	ウィリー・ヴァンドゥワラ (ベルギー・ルーヴァン・ カトリック大学教授・日文研客員教授) Willy VANDE WALLE 「日本・ベルギー文化交流史 -南蛮美術から洋学まで-」
60	6. 1.18 (1994)	J. マーティン・ホルマン (ミシガン州立大学連合日本センター所長) J. Martin HOLMAN 「自然と為作 -井上靖文学における『陰謀』-」
61	6. 2. 8 (1994)	マイヤ・ゲラシモワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所研究員) Maya GERASIMOVA 「外から見た日本文化と日本文学 -俳句の可能性を中心に-」
62	6. 3. 8 (1994)	オギュスタン・ベルク (フランス・社会科学高等研究院教授・日文研客員教授) Augustin BERQUE 「和辻哲郎の風土論の現代性」
⑥3	6. 4.12 (1994)	リチャード・トランス (オハイオ州立大学助教授) Richard TORRANCE 「出雲地方に於ける読み書き能力と現代文学、1880～1930」
64	6. 5.10 (1994)	シルバーノ D. マヒウォ (フィリピン大学アジア・センター準教授) Sylvano D. MAHIWO 「フィリピンにおける日本現状紹介の諸問題」
65	6. 6.10 (1994)	劉 建輝 (中国・南開大学副教授・日文研客員助教授) LIU Jian Hui 「『魔都』体験-文学における日本人と上海」
66	6. 7.12 (1994)	チャールズ J. クイン (オハイオ州立大学準教授・東北大学客員教授) Charles J. QUINN 「私の日本語発見-王朝文を中心に-」

67	6. 9.13 (1994)	フランソワ・マセ (フランス国立東洋言語文化研究所教授・日文研客員教授) François MACÉ 「幻の行列－秀吉の葬送儀礼－」
⑥8	6.11.15 (1994)	賈 蕙萱 (北京大学助教授・日文研客員助教授) JIA Hui-xuan 「中日比較食文化論－健康的飲食法の研究－」
69	6.12.20 (1994)	彭 飛 (日本学術振興会特別研究員) PENG Fei 「日本語の表現からみた－異文化摩擦のメカニズム－」
⑦0	7. 1.10 (1995)	ミハイル・ウスペンスキー (エルミタージュ美術館学芸員・日文研客員助教授) Michail V. USPENSKY 「根付－ロシア・エルミタージュ美術館のコレクションを中心－」
⑦1	7. 2.14 (1995)	嚴 紹璽 (北京大学教授・日文研客員教授) YAN Shao Dang 「記紀神話における二神創世の形態－東アジア文化とのかかわり－」
⑦2	7. 3.14 (1995)	王 家驊 (中国・南開大学教授・日文研客員教授) WANG Jiahua 「洪沢栄一の『論語算盤説』と日本的な資本主義精神」
⑦3	7. 4.11 (1995)	アリソン・トキタ (オーストラリア・モナシュ大学助教授・日文研客員助教授) Alison TOKITA 「日本伝統音楽における語り物の系譜－旋律型を中心－」

⑦④	7. 5. 9 (1995)	リュドミーラ・エルマコーワ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所極東文学課長) Lioudmila ERMAKOVA 「和歌の起源－神話と歴史－」
75	7. 6. 6 (1995)	パトリシア・フィスター (日文研客員助教授) Patricia FISTER 「近世日本の女性画家たち－」
76	7. 7.25 (1995)	崔 吉城 (広島大学総合科学部教授) CHOI Kil-Sug 「『恨』の日韓比較の一考察」
⑦⑦	7. 9.26 (1995)	蘇 徳昌 (奈良大学教養部教授) SU Dechang 「日中の敬語表現」
⑦⑧	7.10.17 (1995)	李 均洋 (西北大学副教授・日文研来訪研究員) LI Jun Yang 「－日・中比較文化考－雷神思想の源流と展開」
79	7.11.28 (1995)	ウィリアム・サモニデス (カンザス大学助教授・日文研客員助教授) William SAMONIDES 「豊臣秀吉と高台寺の美術」
⑧⑩	7.12.19 (1995)	タチヤーナ L. ソコロワ＝デリュースナ (翻訳家・日文研来訪研究員) Tatyana L. SOKOLOVA-DELYUSINA 「俳句の国際性－西欧の俳句についての一考察－」
81	8. 1.16 (1996)	ジョン・クラーク (シドニー大学助教授・日文研客員助教授) John CLARK 「日本の近代性とアジア：絵画の場合」

⑧2	8. 2.13 (1996)	ジェイ・ルービン (ハーバード大学教授・日文研客員教授) Jay RUBIN 「京の雪、能の雪」
83	8. 3.12 (1996)	イザベル・シャリエ (神戸大学国際文化学部外国人教師) Isabelle CHARRIER 「日本近代美術史の成立 - 近代批評における新語 -」
⑧4	8. 4.16 (1996)	リース・モートン (ニューキャッスル大学教授・日文研客員教授) Leith MORTON 「日本近代文芸におけるゴシック風小説」
⑧5	8. 5.28 (1996)	マーク・コウディ・ポールトン (ヴィクトリア大学助教授・日文研客員助教授) Mark Cody POULTON 「能における『草木成仏』の意味」
⑧6	8. 6.11 (1996)	フランシスコ・ハビエル・タブレロ (慶應義塾大学訪問講師) Francisco Javier TABLERO 「社会的構築物としての相撲」
87	8. 7.30 (1996)	シルヴァン・ギニヤール (大阪学院大学助教授) Sylvain GUIGNARD 「筑前琵琶 - 文化を語る楽器」
88	8. 9.10 (1996)	ハーバート E. プルチョウ (カリフォルニア大学ロサンゼルス校教授・日文研客員教授) Herbert E. PLUTSCHOW 「怨霊の領域」
⑧9	8.10. 1 (1996)	王 秀文 (中国・東北民族学院助教授・日文研客員助教授) WANG Xiu-wen 「シャクシ・女・魂 - 日本におけるシャクシにまつわる民間信仰 -」

90	8.11.26 (1996)	王 宝平 (中国・杭州大学日本文化研究所副所長・ 日文研客員助教授) WANG Bao Ping 「明治前記に来日した中国人の外交官たちと日本」
91	8.12.17 (1996)	陳 生保 (中国・上海外国語大学教授・日文研客員教授) CHEN Shen Bao 「中国語の中の日本語」
92	9. 1.21 (1997)	アレキサンダー N. メシェリャコフ (ロシア科学アカデミー東洋学研究所教授・ 日文研来訪研究員) Alexander N. MESHCHERYAKOV 「奈良時代の文化と情報」

○は報告書既刊

発行日 1997年 5月 30日
編集発行 国際日本文化研究センター
京都市西京区御陵大枝山町3-2
電話 (075) 335-2048

問合先 国際日本文化研究センター
管理部・研究協力課

1997 国際日本文化研究センター

■ 日時

1996年12月 17 日(火)

午後2時 ～ 4時

■ 場所

国際日本文化研究センターセミナー室

